

修道中学校

入試科目	算数	国語	理科	社会	C T	総合	
試験時間	50分	50分	40分	40分	50分		
配点	125点	125点	100点	100点	100点	550点	
受験者平均点	80.5点	76.5点	63.2点	67.8点	76.7点	364.7点	
合格の目安	得点	78点	74点	61点	66点	75点	354点
	(%)	62.4%	59.2%	61.0%	66.0%	75.0%	64.4%
昨年度との比較	横ばい	やや易化	やや易化	やや易化	難化	易化	

算 数

- | | |
|---|--|
| 1 | 計算と小問集合 (1)①整数の計算 ②小数の計算 ③分数の計算 ④分数の計算 ⑤約分
(2) 割合 (3) 食塩水の濃度 (4) 仕事算 (5) 平面図形の角度
(6) 平面図形の角度 (7) 立体図形 (8) 統計グラフの読み取り |
| 2 | 両替を題材にした問題 小問数：2 |
| 3 | 冊子のページ数を考える問題 小問数：3 |
| 4 | ニュートン算 小問数：3 |

一昨年度、算数の平均点が51.4点と相当低くなり、昨年度はそれに影響され、78.3点とかなり高くなっていました。その中で今年平均点は80.5点となりました。平均点が80点を超えるのは2013年度以来ですので、難易度の低い年度と言えます。

問題全体を通していえるのが、難易度の高い問題はないということです。正答率が極端に低いであろう出題はなく、全ての問題で受験者全員をふるいにかけているといえるでしょう。

1(1)計算問題です。ここ数年通り、5題の構成となっています。ただ、一点だけ例年と異なるのが、毎年出題されていた計算の工夫を要する問題がありません。難易度自体も、難しい問題はなく、易しい問題もないといえるので、計算力が結果に反映されたと思います。

(2)以降は小問集合です。中程度の難易度ばかりの出題で、実力を問われる問題構成になっていると同時に、円を利用した平面図形等、修道らしい問題も出題されています。小問毎に見ていくと(2)は割合に関する

る問題、(3)は食塩水の濃度に関する問題、(4)は仕事算です。ここまでの3問は、受験生ならば経験したことのある問題ですが、誰でも解けるような簡単な問題とはいえません。これらを正確に処理できるかどうかが分水嶺といえるでしょう。(5)は円を利用した角度の問題です。過去問で解いてきた通りに、中心から等分する点に補助線を引けば解法が見えてきます。(6)も前問と同じく、円を利用した問題ですので、中心から等分した点に補助線を引けば見えてくるでしょう。(7)はちょっとだけ複雑な立体図形の表面積、体積に関する問題です。ほとんどの受験生は解法を知っていると思います。後は計算力の勝負です。(8)の新傾向の問題は難しかったと思います。まず文章を読んで「紙の消費量」の求め方を理解する読解力、聞かれていることを説明する能力等が求められます。加えて、2種類の数値が表示されているグラフはあまり馴染みがありません。受験生にとって厳しい問題になったでしょう。

②は両替というある程度イメージのつきやすい問題です。複雑な状況をイメージする必要もないので、得点源にできる問題です。

③は紙を折って冊子をつくり、ページ番号について考える問題です。まずは文章を読んで、どういう問題なのかを理解しないといけません。文章の意味が読み取れれば、セット毎の周期算になっていることに気付

けます。そこまで分かれば、16で割った余りに注目すれば解けます。

冊子の問題自体はそこまで珍しい問題ではないですが、冊子になる問題を解いたことのある受験生でないと、イメージしづらかったと思います。

④はニュートン算です。王道の題材になっているので、ニュートン算であることは気づけたと思います。比だけで解いていくニュートン算ではなく実数で解いていける分、難易度は低くなっています。難易度は低くなっているとはいえ、ニュートン算なので経験値が大切になってきます。普段からギリギリの勉強ではなく、ある程度余裕をもった勉強をしておくことが大切です。

今年度の算数は前年度と同様、解きやすい問題構成になっています。前半の小問集合で際だって難しい問題がなく、難しい大問もありませんでした。オーソドックスな構成ですので、実力差がそのまま点数に表れます。受験者平均は満点の64%でした。小問を確実に正答させる力を前提として、問題文をよく読みしっかりと考える力が必要です。

対策としては、基本～標準レベルの問題の解答力をつけ、同校の出題する問題よりもややレベルの高い問題にも取り組み、余力を持って臨むことでしょう。

国語

- | | | | | | |
|---|--------------------------|-------|----------|---------|----------|
| 一 | 漢字の書き取り | | | | |
| 二 | 漢字の読み取り | | | | |
| 三 | 今野真二『大人になって困らない語彙力の鍛えかた』 | (説明文) | 約 3200 字 | 小問数 5 問 | うち記述 5 問 |
| 四 | 小俣麦穂『ピアノをきかせて』 | (物語文) | 約 2400 字 | 小問数 8 問 | うち記述 2 問 |

昨年は、漢字と語句の大問が独立した大問3題構成で、語句知識の問題が独立した大問として出題されている新しい形式でした。今年は、語句の大問が姿を消し、代わりに漢字の読み取りが大問として出題され、

大問4題構成のまた新しい出題形式となりました。一昨年出された、説明文と物語文の内容を踏まえて書く作文の問題は多くの受験生を戸惑わせたと思いますが、今年も、独立した大問ではないものの、大問3の

中で自由作文の問題が出題されました。

大問1の漢字の書き取りは手強い問題がいくつか出題されています。「根幹」「縦横」「洗練」「親善」あたりは苦戦した受験生が多くいたと思います。「業績」「輸出」など誤字が頻出するような漢字も見られました。

大問2の漢字の読みは「巻頭」「胸中」あたりが少し難しかったかもしれません。また、「映る」と「映える」など、送りがなで判断するような、注意すべき問題も出題されました。

大問3は、語い力の鍛えかたに関する説明文から出題されました。前半は、頭の中にある「心的辞書」と国語辞典とを比較し、暗記するとはどういうことか、またどんなメカニズムなのかということが説明されています。前半部分で出題された問一と問二はいずれも記述問題でしたが、比較的まとめやすい問題です。問一は国語辞典と脳の違いを明確にすること、問二は本文中に挙げられている具体例を正確に読み取ることがそれぞれ重要でした。

後半は、語いの増やし方について説明されています。後半部分からも記述問題が2題出題され、問三は筆者の考えを、問四は傍線部の理由を問う問題が出題されました。問四は本文には明記されていないものの、『「かきことば」を「はなしことば」として使用している』という点をまとめる、比較的まとめやすい問題でした。しかしながら、問三は本文の中にはっきりとは書かれていない筆者の考えを、文中に挙げられている具体例から考え、まとめるというひねりの利いた問題でした。問五は本文の全体の内容を踏まえたうえで、受験生自身の「心的辞書」にある「修道中学校語彙」を四つあげ、それを用いた文章を書かせる自由作文の問題でした。一見難しいように思えますが、イメージする言葉を自由にあげていいので、比較的書きやすかったのではないのでしょうか。ちなみに、説明会で「修道のことをよく知ろう」というアナウンスがありましたが、これのことだったのですね。

大問4は、音楽が好きな女の子が主人公の物語。主人公の女の子は、

姉の弾くピアノの音に違和感を覚えるようになり、姉と少し距離を置くようになります。問題として使用されたのは、直接的な表現ではありませんが、主人公が感じていた違和感を姉に告げる場面です。

問一の語いは、「とげがある」「投げやり」は簡単ですが、「糸が切れたように」は少し難しかったかもしれません。問二は言い換えた表現を抜き出す問題で、ピアノの「音」を比喩を用いて表現していることを踏まえ、「重い」や「歯車がまわっている」などの表現から、「工場」や「金属音」をつなげられるかがポイントでした。問三、問四は心情把握の記号選択の問題で、傍線部前後の内容を丁寧に読み、そして選択肢の細部を読みもろさずに選択すれば難しい問題ではありません。しかし、記述問題に意識が向くあまりに、丁寧に読むという作業がおろそかになり、案外差がつく問題になるのかもしれません。問五は理由を記述する問題ですが、傍線部の後に続く「いい器が焼けないときは、心とからだのどっちかがおかしいんだって」の部分から読み取ることが出来、「器が焼けない」を「ピアノが上手く弾けない」へ置き換えることができればまとめることができます。問六は、姉の心情を記述する問題ですが、これは難易度が高いと言って良いでしょう。直後の姉の台詞が手がかりになりますが、この台詞部分だけではまとめきることはできず、本文全体を通しての姉の台詞や行動を踏まえたうえで、「お母さんに対する気持ち」「先輩に対する気持ち」「妹に対する気持ち」「自分自身に対する気持ち」を明確にしながら解答を作らなくてはなりません。全てを満たした解答を作ることは難しいかもしれませんが、最後の力を振り絞って、少しでも多くの部分点を積み上げたい問題です。

今年も、「しっかり書ける」ことが求められる、記述問題が主体の出題でした。これら記述問題を空欄にせず、しっかり書くというのが前提ですが、一方で、漢字や語句でいかに得点できたか、また、数少ない記号選択や抜き出しを取りこぼさずに得点できたか、実はこのあたりが合否のラインを分けているのかもしれません。

理 科

- 1 地学分野から、プレートの動き に関する問題（小問9）
- 2 物理分野から、てこのつり合い に関する問題（小問11）
- 3 生物分野から、光合成 に関する問題（小問9）
- 4 化学分野から、酸素の性質 に関する問題（小問10）

昨年は、物理・化学・生物・地学の4分野から大問5題の出題でしたが、今年は例年通りの4分野からの大問4題構成に戻りました。しかし、それは、大きな変化ではなく、問題レベルや傾向は近年ほとんど変わっていません。いくつか驚かされる問題もありますが、全体的には、それぞれの単元の典型題といえる問題を並べて、その単元の理解度をしっかり試すことができる良い問題だと思います。さらに、これはいかにも修道中の入試問題らしいと言えるのですが、分野に関係なく、計算問題や思考問題に取り組みさせることで、その理解力を試したいという意図が今年も伝わってきます。

1 プレートの動きに関する問題で、今後、他の中学校でも出題の機会が増えると予想されます。決してプレートの動きを知識として問うのではなく、問題文としてのプレートの説明文をしっかり読んで、示された図と照らし合わせることで解答は見つかります。問1は大きな数字にはなりますが、単純な計算問題で、しかも選択肢になっているので、間違っただけではいけないでしょう。ただ、「移動した距離」なのか「移動した後の離れている距離」なのかの注意が必要です。ここでのミスは多かったと思います。

2 てこの重心の捉え方が一つのテーマとなっています。これは、昨年のある中学校の最後の問題に似ています。受験生の対応としては、あまり意識しすぎないで、てこのつり合いの定型問題として解いていけば全問正解といかないかもしれませんが、理科の合格点には到達したと思いま

す。修道の「てこ」としてはやや物足りない感じはします。

3 光合成という頻出内容からの出題ですが、逆に問題文（二酸化炭素を取り込む速さはでんぷんを作る速さに比例、熱帯を原産地とする植物など耳慣れない表現が並ぶ）を読むことで逆に難しい印象を与えています。問1・2は基本知識で間違っただけではいけない問題です。問3は思考力を問う良い問題ですが、4つの選択肢なので、なんとなく正解した生徒もいたでしょう。問4のグラフ作成の問題は、グラフ自体は、何度も目にしたことがあるはずですが、いざ外形をグラフ化するとすると増減をくり返しながらかつていく意味が理解できていないと正しくかくことはできません。この問題は、広島市内の中学校では初めての出題です。問5は、読んでも意味がわからなくなって適当に答えた答案が多かったと思います。問6・7は定番中の定番で間違っただけではいけない問題です。

4 会話文という設定で油断させておいて、最後の最後で5問連続の面倒な計算を用意するのは受験生泣かせの展開です。内容は、酸素の水への溶け方が水温、水の量、圧力によって変化することを文章中で示し、その情報から酸素の重さや体積を計算させるという問題で、正確な計算力が問われました。

対策としては、簡単ではない計算問題に対応出来る計算力、長い問題文を読みきる読解力、表や図を正確に読み取る分析力が必要となります。総合的な演習を通して、しっかり力をつけておきましょう。また、学校の入試説明会の情報にも注意しましょう。

社会

- 1 《地理》都道府県の気温と降水量，防災関連，情報通信メディアに関する問題(15問)
- 2 《歴史》弥生時代から戦後に関する総合問題(21問)
- 3 《公民》日本国憲法，国会，内閣，裁判所と時事問題(13問)

修道中学校の社会科は、昨年度に比べ易化しました。今年度は受験者平均点が 67.8 点と昨年度(58 点)より約 10 点上がり、受験生にしてみれば解きやすい難易度であったと思います。問題数はまた歴史・政治分野の問題数は例年とほぼ同じでしたが、地理の問題数が 15 問と昨年度より 8 問減ったため、総じて全体のボリュームも減った形となりました。

①は会話文形式の出題でした。統計表を使った問題は修道中学ではお馴染みのものです。問 3 は各都市の気温と降水量の統計表です。受験生にとっては雨温図の形が見慣れているため、いかにして統計表の数値をみて、太平洋側や日本海側の気候の特徴を読み取れるかがカギになりました。また問 5 は土石流についての記述でした。ただし単語の説明をするのではなく、人間がもたらした原因によって被害が大きくなる場合がある、その原因を説明する問題。そして問 7 は SNS の年代別利用率から、メディアの組み合わせを答える問題でした。どちらの問題も時事問題関連の情報を知っているか否かではなく、事象を掘り下げて理解しているかがポイントになりました。例えば、H30 年 7 月豪雨にて福岡・広島・岡山などに深刻な被害をもたらした集中豪雨は特に土石流の被害が報道されていました。大規模な宅地造成を行うと十分な排水ができる流路幅が確保できない点が問題点として挙げられます。また SNS として、メールや電話の機能がある LINE は利用率が各年代高く、登録時に個人情報(携帯電話番号など)が必要な Facebook は 10 代の利用率が低いことを知っていたら解きやすかったはずです。

その他、これもお馴染みだったのですが、地名の読み方を問う問題が今年はお題されませんでした。

②は弥生時代から戦後に関する総合問題となっており、A から J ま

で、歴史上の人物が自己紹介をするという形式でした。説明している内容から、それぞれがどの時代のものかを理解した上で解答していきます。どの時代のものかはっきりわかりやすい内容ばかりで、問 4・5 の正誤問題、問 6 の普通選挙法の内容を説明する記述も頻出内容であり、受験生にとっては解きやすかったのではないかと思います。また、その中で問 11 の中国地方にある世界遺産を案内するならどこを案内したいか、そのアピールポイントをふまえて説明する問題は、「厳島神社」や「原爆ドーム」が分かっても、何をアピールポイントにするか自分の言葉で説明するのが一苦労だったと思います。

③は日本国憲法，国会，内閣，裁判所と時事問題からの出題でしたが、どの問題も基本事項からの出題でした。ただし、問 3 のベーシックインカムを説明する問題は受験生にとって難しい記述でした。問 2 ②のユニバーサルデザインのように社会科で頻出するカタカナ言葉はそのほとんどが英語由来の言葉です。そのため英語の意味が分かれば言葉の意味が分かりますが、その方法を受験生自身が自発的に取り組むのは難しいです。だからこそ、機械的な単語暗記になるのではなく、「なぜ？」を大事にする学問であって欲しいのです。

今年も難問奇問はなく、基本的な問題中心に構成されていました。その中で、単なる知識のアウトプットだけではなく、思考力を試す問題が増えてきており、普段のニュース等も単に覚えるのではなく、「自分ならどうするか？」を考えながら興味を持って取り入れていくことが求められています。それでも基本的な知識の定着は不可欠ですので、興味を高めて積み重ねていくことが大事です。

